

介護事業者の事故対応

舌を切って経管栄養になり急性肺炎で死亡

－事故と死亡の因果関係は？－

■舌の傷と経鼻経管と肺炎の因果関係

Hさん(88歳女性)は要介護度4の老人保健施設の入所者です。ある日、昼食のカレーライスを食べっていると、突然Hさんの口から厚さ5mm、大きさ2cm四方のガラスの破片が出てきました。口腔内を調べると舌を1cmほど切って出血していました。職員はすぐにガラス片を取り除き、看護師を呼びましたが、看護師は「重篤性は無い」と判断し止血をして軟膏を塗り様子を見ることになりました。看護師は「口を良く洗って清潔にして」と指示し、その後の対応は職員に任せることになりました。相談員が家族に連絡して謝罪し、「止血したので大丈夫です」と説明しました。ところが、3日後に再び、舌の傷口から出血したため、家族連絡の上、総合病院の口腔外科を受診し、治療を行いました。傷口が治りませんでした。

家族は、食事にガラスの破片が混入してケガをしたことに強く抗議し、事務長は今回の原因を「厨房でミキサーを破損したことが原因。給食事業者に二度とこのようなことが起きないように厳しく注意した」と説明し、家族に謝罪しました。Hさんは、その後、傷の痛みで食事が摂れなくなり、施設では鎮痛剤と安定剤を処方して2日ほど点滴で様子を見ましたが、回復せず、しばらく経鼻経管栄養で傷の回復を待つことにしました。ところが、経鼻経管にした4日後に急性肺炎で緊急入院し、5日後に亡くなってしまいました。家族は「母がなくなったのはガラスの混入事故によるケガが原因だ」として、施設に賠償請求をしてきましたが、施設は「事故を起こした給食事業者に補償させる」と回答するにとどまりました。

受診せず軟膏を塗った看護師の対応は過失か？

■舌の傷への対処は適切か？

本事例の賠償責任の判断では、事故と死亡との間に因果関係があるかどうか問題となります。舌を切った事故に過失があるのは明らかですが、事故と死亡と言う結果に因果関係が無ければ舌の傷の賠償責任を負担すれば良いのです。しかし、事故後の対応に過失があつて死亡と言う結果を招いたのであれば、因果関係が存在し賠償責任も負担しなければならないでしょう。

本事例では、「ガラスで舌を切った」→「応急処置のみで受診しなかった」→「傷が悪化し経管栄養となった」→「肺炎で死亡した」という経緯をたどっています。改めて、事故直後の看護師の対応を考えてみましょう。



■口腔内の傷は歯科医の受診でも良い

舌や口腔内に傷を負うと治りにくいのは、医療従事者としての常識です。口腔内は絶えず濡れていて止血薬や軟膏も効きませんし、自然に動いてしまって安静を保つことができないからです。また、口腔内の傷が悪化すれば食べ物の経口摂取に大きな支障が出て、本事例のように最悪経管栄養になることも予測しなければなりません。

看護師は舌の傷を迅速に治療するために、歯科医または口腔外科をすぐに受診すべきだったのです。歯科医や口腔外科で炭酸レーザーなどの治療を受ければ、傷は早期に治癒して本事例のように生命の危険に及ぶことはなかったかもしれません。以上のことから、本事例の看護の対応には問題があったということも考えられるのです。

発行責任者

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
マーケット開発部 市場開発室
担当 堀江・窪田 TEL 03-5789-6456

担当課・支社 代理店